

大賞

「柳田邦男先生へ」

〈絵本との思い出と共に〉

森 奈津子

はじめまして。

小さい頃、母に読んでもらった絵本の思い出と、自分が母になって子どもたちとの絵本の思い出をお伝えしたくお手紙致します。

母によく読んでもらった絵本の中に「アーコのおみまい」という絵本があります。アーコが、お母さんに頼まれ病気のおばあちゃんに蜂蜜を届けに行くお話です。大人になり、思い出した時は、どんな話の内容だったかよく覚えていませんでした。しかし、読んでもらったときに感じた感情は、

不思議とはつきりと覚えていません。ときどき、わくわく、息をのむような怖さや不安、驚き、笑い、ほっとできる安堵感やすがしきなど、様々な感情が蘇ってきました。母に何度もこの本を読んでもほしいとねだったのは、そんな絵本の世界観が楽しくもつと味わいたいと思ったからなのだと思います。

「めつきらもつきらどおんどん」もよく読んでもらいました。母が、「もんもんびやつこは、(妹)ちゃんみたい」「しっかかもつかかはなっちゃん(私)みたい」「おたからまんちはお腹が出てるからお母さんだわ」なんていいながら、絵本に出てくるお化けたちに自分たちを重ねて、絵本の中に入り込んで楽しんだ感覚を覚えています。いつもと同じように読んでもらっていたある日の事、

母の一言で大笑いをしたことがあります。家族の

中の会話なので柳田先生にお話することは少々

お恥ずかしいのですが、内緒でお話し致します。

母が「おたからまんちん」の絵を見て、はつと気づいたように「すごい名前ね、まんとはちは確かにお宝ね！」と大笑いし始めたのです。小さいながらに意味をとらえた私たちも声を上げ笑い転げたのを覚えています。不思議なもので、こうしてお手紙を書いていると、あの時笑った感情や、母を真ん中にして私と妹が母に寄りかかりながら見ていたことも思い出します。大人になり、この絵本を手にとった時、「大切なものをみつけた！」という思いが込み上げ嬉しくなりました。この絵本を手にとると、絵本の中で感じた様々な感情や、母との笑い声や、ぬくもりを感じる、今でも私の

中で生きている大切な絵本です。

長女が生まれ自分が母になり絵本の存在がもつと大切なものとなっていききました。最初に読み聞かせをした絵本は「ころころころ」「もこもこもこ」です。言葉はわからなくても綺麗な色彩が娘の心を育ててくれるのではないかと思いました。はつきりとした色、身近な音とリズムが娘にとって心地よかつたようによく見ていました。生活の中でも、絵本に出てくる場面を想像しながら、ボールをころころ転がしたり、体をころころと寝返りをうったりし遊んでいました。7か月になる前後の時だったと思います。娘がなんとなく

「こおこおこお（ころころ）」と言いだしたのには驚きました。

「もこもこもこ」では、「ぱく」のシーンを見て、

ページをめくらずとも「もぐもぐ」と食べる真似をしたり、「ぎらぎら」のシーンを見ると「ぱちん！」

と手をたたくようになりました。産まれて1年満たない娘が、場面を記憶し、次のページを予想して行動に表し、喜びを感じていることを目の当たりにし、絵本の素晴らしい力を実感しました。こうして娘に読み聞かせをしていく中で「アーコのおみまい」や「めつきらもつきらどおんどん」の記憶が思い出され、全く違う絵本なのにもかかわらず、たくさんの共通点を感じた事を覚えていません。

長女はもう6年生、長男は4年生になり絵本を読み聞かせる事は無くなってきましたが、一番下の4歳の息子に「今日は遅くなったから絵本を見ずに寝ようか」と言つと、なぜか姉、兄が「えー！」

と言つたりします。面白いもので、それぞれ宿題や歯ブラシをしていても耳は傾けていたようです。私は今、たくさんの親子に関わる仕事をしています。より多くの親子が絵本を手取るきっかけ作りができればと思い、母と子どもたちと絵本の思い出と共に、読み聞かせをしています。

絵本を通して感じた感情やぬくもりは、大切な思い出となり、生活の中でも仕事をする上でも、私の大きな支えとなっています。これからも、絵本と共に子どもたちと共に大切な時間を過ごしていこうと思います。

〜柳田邦男先生からのメッセージ〜

森さんのおたよりは、まず自分が幼かったころ

に、母親に絵本を読んでもらったときに感じた感情について、丁寧に書いています。

絵本の内容はよく覚えてはいなくても、「読んでもらったときに感じた感情」は、「どきどき、わくわく、息をのむような怖さや不安、驚き、笑い、ほっとできる安堵感やすがすがしさなど」の感情が蘇ってくるというのですね。これはとてもだいたいなことを意味します。

幼いころに、親の情感のこもった肉声での読み聞かせによって絵本の物語の世界に入りこむことで、そういった様々な感情が生れてきて、子どもの感性がきめ細かく発達し、他者の心を読み取る力も身につき、豊かな感情表現もできるようにな

るのです。

もし、そういう読み聞かせを全くしてもらえなかったら、その子は感性が育まねず、感情表現が怒る、泣く、笑うといった単純なものだけになってしまう傾向に陥ってしまいがちです。

また、毎日絵本を読んでもらっている子は、言葉の発達と文脈理解力も自然に身につけていきます。

森さんが、母親に絵本を読んでもらったときに経験した様々な感性が、今でも蘇ってくると書いていることは、絵本が子どもに与える影響がいかに大きいかを示していると言えます。

そして、そのような幼少期の絵本体験をした子

どもが、やがて大人になり、子育てをするようになる、誰に教えられるでもなく、自然に子どもに絵本の読み聞かせをするようになるのです。森さんも、まさにそういう人生を送ってきたことが、三人のお子さんへの読み聞かせの情景描写から伝わってきます。

このような親から子へ、子から孫へと、自然な流れで絵本の読み聞かせの習慣が継承されていくのを、私は「家族の絵本文化の伝承」と呼んでいます。

これに対し、親が仕事で忙しいことを理由にしたり、もともと絵本に興味を持っていなかったりして、子どもと一緒に絵本を読むことをしない家

庭では、子どもの言葉や感性の発達が阻害されがちです。そこに、スマホなどの電子機器が入ってくると、子どもの関心は、スマホによるメールのやり取りやゲームに多くの時間を費すようになり、生き生きとした感性や考える力やコミュニケーション力が発達しにくくなります。

そういう時代だからこそ、「家族の絵本文化の伝承」が重要性を増していると、私は捉えています。森さんのおたよりを大賞に選んだ最大の理由は、そこにあります。